中年期婦人の身体的美意識についての一考察

三　村　静　香

I　はじめに

美が何であるのか，また美意識の表現とは何であるのかについては，哲学者から体育学者に至るまでが，知りたいところである。

美学の心理は何か。感覚の分野は何か。また美の知覚における，あるいは美の構成における悟性の分野は何か。特に，美のわれわれに与える影響と区別して，美の本質は何であろう。何が美を創造するのであろうか。美は実に素晴らしいものであるが，何がそうさせるのだろうか[1)]。と疑問として考えるならば，感覚的にも形而上学的な分野の枠を拡げることはできるが，その結果を見出すことは大変困難なことのように思われる。その困難な分野から，美に対する意識，スポーツ美，自然美，身体美について考えるとともに，女性の美的意識がどのように思われているか，また特に，身体的美意識と表現に対する美意識について検討してみたい。

II　身体行動の美学として

ギムナスティケが提唱している身体文化，運動文化，身体活動科学は，体育美学を学んでいるものは周知のとおりである。

身体文化については，グロル，シーガー，ドログシュなどの考え方が示さ

注1）E・ディムネ著　大竹勝訳『何によって生きるか』彌生書房，1972年，96頁。

れている[2]ように，「身体文化とは，人間の生命力をまもり，きたえ，たかめるために，身体あるいは身体活動を基盤・媒体として形成された文化の総称である[3]」とし，その系譜としてスポーツ，ダンスなどの身体活動（運動文化），身体そのものについての科学的体系としての医学，日常生活における身体活動が，作法，礼法，躾などとして洗練され，高い文化的内容と形式をもつもの，身体活動を媒体として，人間形成を目指す教育としての体育を想定している。

したがって，体育美学は，身体行動美学――行動美学あるいは運動美学として，身体活動，身体そのもの，さらに日常生活における身体行動を包含したものであり，スポーツ美学は，行動美学の一領域とみるわけである[4]。また，美的現象の区分については，自然美と芸術美に分けられ，さらにこまかく，人間美，文化美，技術美などがあるが，それぞれの分類の中に，独自の美学がある[5]とされている。

身体美では，自然美と精神美があり，その両者を合せたものとされている。身体美には，形態的な美と生理学的な美があり，単なる肉体美や裸体美ではなく，そこに精神美が合い重なってこそ人間美・身体美としての自然美があるように思われる。

身体的理想体型については，手嶋昇の「身体均整法」（不昧堂）やシュトラッツの「女性の美体系」・「女体の美」（西田書店）などに掲載されている。

また，スポーツ美においては，そこには，それぞれのスポーツの競争があり，美意識を考えるならば，そこには少し無理が生じるのである。なぜならば，美意識的要因よりも，競争要因に重点が置かれ，勝敗に目的があるからである。しかし，運動美として捉らえるならば，そこには，身体運動によって表現される表現美や芸術美がともない，美意識の要因として考えられるのである。また，女性における動きの中の自然美について述べてみたい。

2）岸野雄三著「大概念としての身体文化」『体育史』大修館，1973年，25頁。
3）近藤英雄著「体育と身体文化」『体育新論』タイムス，1973年，9頁。
4）近藤英雄著『スポーツ美学論』（体育の原理第10号）不昧堂，1977年，9頁。
5）木幡順三著「美の探求」『美の構造』宝文館，1968年，5頁。

動きの美は，優美であるとシュトラッツは提唱している。日常生活においても多種多様の優美がある。生活のリズムに合わせ，形態的にも，機能的にも洗練され，単純化され，様式化されたそれぞれの動きの中には，女性だけが持つ表現があり，その一つ一つの動きが優美さを持っている。その動きの優美さは，自己の意識の中にあるものではなく，生活や環境の中から自然に表現されるものである。その表現の中でも，年齢によって異なった表現である。成長の過程においてその表現はまちまちであるが，そこで表現される優美には，行動美学，あるいは，動作の美学としても考えられるであろう。

Ⅲ　スポーツの美学として

スポーツ美学を，広範囲に考えるならば，行動美や運動美，表現美もスポーツの美学としての一部であろう。

美学については，「芸術・自然・人間生活などにみられるさまざまな美・すなわち美的と呼ばれる現象について，その本質や法則を明らかにする学」とし，スポーツ美学は，「スポーツ的な美的現象について，その本質や法則を明らかにする学」として近藤[6]は示しているが，スポーツを芸術的美学の側面からも視るとしたら，スポーツは，スポーツ芸術として考えられ，スポーツ美学としてより広範囲に捉えることができよう。

スポーツの美学が，美を目的とするならば，その捉え方はまちまちであり，その捉え方や，解釈によって別々の美学が成り立つのである。また近藤は対象についても次のようなことを述べている。

a　主として美的対象の側面から美を研究する客観的美学，および美的対象を把握する主体の態度あるいは作用の側面から美を扱う主観的美学の2つがある。

b　美的対象と美的作用にからむ美意識があげられているが，ここでも心理学美意識と，美的価値体験としての美意識の立場に分かれる。

6）近藤英雄著，前掲，14頁。

c　美的体験も，受容的な美的享受と，能動的・生産的な芸術創作の両面を有しており，享受美学，創作美学の２つがある。

d　美的体験は，そこに働く作用の面に関して，主観的知的側面と，主観的情意的側面を有しているので，「美的直観」を主とする主知主義的美学と，「美的感情」を主とする主情主義的美学とに分けられる。

e　美的対象を構成する要素としては，「形式」と「内容」があり，それに即して，形式美学と内容美学の２つがある[7]。

以上のように，美学の視点を変えることにより，さまざまな美学が成り立つのである。

また，スポーツ美の形式要素としては，釣合，均斉，プロポーション，律動を運動の形式美的要因とし[8]，６つの美的特性を３種類に分け，18種の美的要素に分析している[9]。

時間性（すばやさ，加速性，リズム）

空間性（広さ，高さ，重さ）

強靱性（強さ，激しさ，しぶとさ）

巧緻性（器用さ，正確さ，バランス）

愉悦性（華やかさ，エロス，スリル）

雅味　（柔らかさ，滑らかさ，上品さ）

また別の面からも，マイネルが運動学面から，ダブラーが舞踊学面[10]から今後のスポーツ美の形式的要素を示している。

Ⅳ　スポーツ実践者に対する美として

スポーツの美学や運動美を追求していくためには，スポーツの実践者が存在しなければスポーツの現象は成り立たない。スポーツにおける美学や美

7）同上，15頁。
8）松田義之著『運動の美学』大修館，1968年，303頁。
9）勝部篤美著『スポーツの美学』杏林書院，1972年，25頁。
10）ダブラ著・松本訳『舞踊学原理』大修館，1974年，147頁。

意識は，本質的には，実践者がつくり出すものであり，スポーツにおける美的対象として最も重要な役割なのである。

実践者が美的行動を行うためには，実践者は，体力と技術がともなわなければならない。そこには基礎的な技術が必要なのである。しかし，より鍛練された技術ならば，そこには当然技術美が加わり，より一層の美的価値感が養われるのである。また，実践者が没頭しているスポーツには，実践者のみに与えられる美しさがあるといえよう。また，実践者自身の身体そのものが，ある種の美しさを持つようになる。スポーツの種目によって異なるが，運動によって鍛練された身体は，無駄な脂肪は落され，引きしまった筋肉質的な身体となり，身体美となるものがそこに出来上がるのである。このような身体の形態的美しさは，運動のみによって形成された身体的美として取り上げられる。

V　婦人における身体的美意識として

身体的美の表現と運動美について，対象者を中年期婦人に向けて考察してみた。

婦人たちにおける美意識では，一般的に考えられることは，運動実践者と観照者に分けなければならない。それは，運動実践者と，観照者では，美的価値が異なってくるからである。美的価値の違いは，それぞれの美的体験の違いから生じるものである。観照者の美的体験は，享受体験であり，一方実践者の美的体験は，実践体験であるからである。運動におけるこの2つの美的価値は，根本的な差異を示している。しかし，観照者の美的価値を示す体験は，運動実践者による運動美の中にあるのである。また，実践者による美的価値は，実践体験による美の存在が明確であるとするならば，そこに美意識が生じると思われる。

実践者の美的体験の種目は，数多くあるが，その中の一つでエアロビクスダンスを取り上げてみたい。エアロビクスダンスは，今ではどこの都市にお

いても盛んに行われている。エアロビクスダンスがこれほどまでに普及したことは，誰にでも手軽に身体の体力保持・増進には，大変効果的な運動と考えられているからである。しかしエアロビクスダンスの効果も，身体的美意識と，運動美としても考えられるのである。また，エアロビクスダンスの中には，ダンスの美的要素が多分に含まれていることが分かる。このダンスの美現象をエアロビクスダンスの中の美に対する要因として取り上げてみたい。

ダンスと美は，切り離せないイメージがある。ダンスの活動を美的な活動という潜在意識は，誰でもが持っていると思われる。ダンスの美しさは，美的表現による意識存在と考えられる。ダンスには，

A　動きの流れに美しさが感じられる。

B　ポーズに美しさを感じる。

と抽象的・具体的な美というものと，動きやポーズのように部分的認識が持たれている。

すなわち，抽象的に捉えられたダンスの美現象内容から，総体的な表現美，あるいは，美的表現活動という要素内容がある。また，動きの流れに美しさが感じられるという具体的な認識内容から，時間的美要素を表現している現象内容を見出すことができる。また，ポーズに美しさを感じるという具体的な認識内容から，空間的な美要素を見出すことができる。すなわち，ダンスの美現象内容は，総体的な立場から美的表現活動として捉えているし，また部分的な立場から時間的な美要素として，また空間的な美要素として捉えている[11]。とされていることからダンスの美を形成する美的現象内容は，この3分野から推測できるのではないだろうか。また，美的表現活動の要素としては，内面的要素と外面的要素に区別されるが，基本的要素として両要素をつなぐ調和的な美要素がある。

内面的美要素には[12]，ダンスの美しい表現を形成する要素内容に生命活動のリズム要素がある。生命活動の要素内容とは，自己生命から流れ出るエネ

11）小林信次『スポーツ美学論』大修館，1977年，129・130頁。
12）同上，135頁。

ルギーが，表現活動に躍動として表出されるリズムである。この生命リズムが，魅力的な存在となり，美的な意識に結びつく性格を持っていることになる。一方，外面的美要素においては[13]，動きから見出される時間的要素・動きやポーズによる空間的要素・表現活動をつくる技術の要素となる。また，基礎的美要素としては，表現できる身体にある。身体的美要素には，均斉・姿勢・柔軟・力・表現力が求められ，これらの基礎的美要素が，身体美・運動美の美形成への有力な要素ともなっている。また，リズム（音楽として）における要素は，ダンスの美的表現に対して附随的な要因があり，その要因が美形成に大きな効果を与えている。

以上のように，エアロビクスダンスにおいても，ダンス的美的要素が存在し，身体美・運動美として捉えることができよう。また，エアロビクスダンスの主要なことは，個性の美的意識が，美的表現活動に移行し，その美は，個性美として存在するであろう。

Ⅵ　まとめとして

自然美学や運動美学，美的表現活動の結果を論ずることは困難なことである。また，美意識や，表現についても同じことがいえよう。それは，運動を理解できるということの中で，感じたり，行動したりすることを見出すのは少ないことにあるからである。人間学的な規範や身体に向けられていた価値で共通なものは，わずかなものしか見出せないということにあるからである。しかし，そのわずかな価値の中から，美の本質を探求したわけである。スポーツに限らず，一般的美的事象は，科学的あるいは道徳的事象と違って，主観的・感性的な制約に影響されやすい。その意味では，美的事象は客観的原理に基づかない非合理的な事象であるかのように思われる。

美が人間生活の心理面に何らかの効果をもたらすことは否定できないとしても，その効果は，単に心理面だけではなく，社会面にも道徳面にも及んで

13）同上，136頁。

いる。また，心理的効果は，美的な存在が，心理的作用に及ぼした効果の一部に過ぎない。美という事実を，単に心理的効果に当たる快感情に翻訳してみても，美そのものを説明したことにならない[14]。ということである。また，スポーツの美や表現の美は，第三者がスポーツを見て説明したとしても，自分自身の目で見ない限り，いくら説明しても，その美的要素は，わからないのである。スポーツの美においても，他の一般の美と同様にそれを見なくては美の存在が捉えられないのである。また，運動を実行することによって実践的な美の価値が分かるのである。

ここで，中年期婦人のエアロビクスダンスの実践者と一般婦人の観照者の美意識について述べてみたい。エアロビクスダンスの観照者は，あくまでも享受体験であり，目で見るところだけの美的価値なのである。観照者の美意識の中には，実践的な美的評価は見られず，美に対する認識も実践者と比較するとその認識は低いように思われる。また，特に美的表現において，その認識も無関心のところにあるかのようである。しかし実践者においては，身体美・運動美・表現美そして芸術美に及ぶ美意識が養われている。エアロビクスダンスという身体運動の実践活動の中から，その美的認識を養い，その価値感を築き上げている。しかし，実践者の中には，単なる体型の変化を，美意識として誤認していることがある。婦人の身体的美意識の中に細みの身体という願望から，体重の減量に重点を置き，目に見て細みの身体であれば，それが身体美として捉えられているようである。身体運動で作り上げられた均整的な体型には，運動によって鍛えられた美しい身体美がそこにあるということである。このように，一般的には美意識についてまだ，理解されていないのだろう。

最後に，「美的」とは何であるか。美的ということが，美しいという言葉で形容される現象のみを指すのではなく，美的なものという広義の概念である。美的ということは，おのずから価値としてあるかぎり，実践者の生命力や人格性を美的対象の内容的契機として含んでいるのであり，観照者は，そ

14）井島勉『美学』創文社，1974年，53頁。

れを現象の奥にひそむ本質として直観に共感するがゆえに，美的なのである[15]。したがって，美的ということは，感性的であると同時に価値として「根源的」であるといえよう。

また，運動の美において何の役に立つか，人間にとって美的なものは，大切なものなのか。それは，日常的な有用性としては，極めて消極的である。しかし，実存的なものと実体的なものが調和してこそ美的現象は価値である[16]。

このような観点から体育美学を考察することにより，美的価値や美的評価，美意識に至るまでの根源には，人間の生命からということに達し，この稿を終わりにしたい。

15）樋口聡著『スポーツの美学』不昧堂，1987年，262頁。
16）同上，270頁。